

mcg に、TC, OTC では 25 mcg に Peak がみられた。

大腸菌, *Klebsiella*, *Citrobacter* および *Proteus* 群は、LM にやや感受性が高いようであつたが、MIC 12.5~25 mcg/ml で線を引くと、*Proteus* 群に LM 感受性株がいくらか多い以外には、4 者の間に著しい差はみられなかつた。

4) SM, CP, TC, KM の多剤耐性との関係を見ると、緑膿菌では 4 剤耐性 86 株中、RM 耐性は 46 株、LM 耐性は 41 株であつたが、他の菌種では、4 剤および 3 剤耐性株は、いずれも RM, LM, OTC にも耐性であつた。

以上の成績のうち、特に注意される点は、緑膿菌の RM 感受性については、さらに検討の必要があることと、病巣由来大腸菌の約 30% は、RM 1.56 mcg 以下の感受性を示した点で、RM の抗菌力は明らかに TC より強いと示唆された。

(114) Methacycline に関する細菌学的研究

板垣守正・中沢昭三・山本郁夫

東京大学伝染病研究所

西野武志・宮川和子

京都薬科大学微生物学教室

Methacycline は、Oxytetracycline から合成された、6 位の位置に Methylene 基が導入された、新しい Tetracycline である。

今回私どもは、Methacycline (MC), Oxytetracycline (OTC), Tetracycline (TC) を同一条件下で、試験管内抗菌スペクトラム、臨床分離ブドウ球菌 102 株に対する感受性分布、マウス実験的感染症に対する治療効果などについて比較検討し、次のごとく成績が得られた。

(1) 抗菌スペクトラム

MC はグラム陽性、陰性菌群何れに対しても TC, OTC よりも秀れた感受性を示した。

(2) 臨床分離細菌に対する感受性分布

1966 年度分離された病原ブドウ球菌 102 株に対する、感受性分布を比較したところ、分布のピークが MC では 1.56 mcg/ml, OTC では 12.5 mcg/ml, TC では 3.12 mcg/ml と MC が最も秀れ、TC, OTC の順になつていた。

また 102 株中 100 mcg/ml 以上の耐性菌が 3 剤とも、約 40% に認められ、これらの 3 剤間には完全な交叉耐性が認められた。

(3) マウス実験的感染症に対する効果

感染菌として、ブドウ球菌、溶血レンサ球菌、肺炎球

菌および肺炎桿菌を用い、各々感染後 1~2 時間目に 1 回、経口治療し、その延命効果を比較検討した結果、いずれの場合においても、MC が TC, OTC よりも秀れた効果を示した。

以上の結果、Methacycline は Tetracycline, Oxytetracycline に比較して *in vitro*, *in vivo* 共に秀れた TC 系抗生物質であると思われる。

(115) 6-メチレンオキシテトラサイクリンに関する 2, 3 の検討

北本 治・深谷 一太

東大伝研内科

6-Methylenoxytetracycline (MOTC と略す) は、すでにひろく使用されているが、今度改めて検討を行なう機会があつたので、その成績を報告する。

黄色ブドウ球菌の TC, MOTC, DMCT, ML-TC に対する感受性値を、肉水寒天平板を用いて比較すると、完全な交叉耐性がみとめられ、M. I. C. 値はほぼ同等であつた。グラム陰性桿菌の感受性値の比較でもひとしく交叉性をみとめた。

MOTC の制菌殺菌作用は TC と比較して差をみなかつた。

MOTC は赤血球吸着性が大きく、マウス肝による不活化を中等度に受け、セロファン嚢を用いる透析によつて、血清蛋白結合率は 40~65% であつた。

金属イオンによる不活化を CaCl_2 , MgSO_4 , 明ばんの 3 種の溶液を用いて検索したところ、何れも強く不活化をうけるが、MOTC は TC, DMCT, ML-TC の何れよりも各溶液において不活化をうける度合がもつとも少なかつた。

マウスに 150 mg/kg 経口投与したときの臓器内濃度を TC と比較すると、肝では TC に比して低値を示したが、血中濃度は同等ないしやや高く、持続性を示した。

マウスのブドウ球菌背部皮下接種による実験的感染症において、1 回経口投与による治療効果を TC と比較すると、ほぼ同等の成績と考えられた。また同様の感染実験において、各マウスに TC 2.5 mg, MOTC, DMCT, ML-TC それぞれ 1.5 mg 宛を 1 回経口投与したときの成績はほとんど差なく、等しく有効と判定された。

臨床例として非溶血性レンサ球菌を尿中 10^6 /ml 以上みとめた腎盂炎の 1 例に、MOTC 1 日 900 mg 7 日間投与し、臨床症状の軽快をみとめたが、尿中細菌は *Proteus mirabilis* 7×10^8 /ml となつた。一応有効と判断された。副作用はみられなかつた。

気管支拡張症の 1 例に MOTC を長期に使用し、最初

起炎菌不明であつたが、投与により下熱、咳・痰減少、白血球正常化を認めたが、次第に再び悪化し、黄色ブドウ球菌を分離し症状の改善はみられなくなつた。本例も一応有効とされたが、菌交代のためかその効果が一時的であつた。

本剤は他の TC 系諸剤に伍して、ほぼ等しい値を有することが、改めて認められた。臨床使用時の副作用発現の多少などについてさらに検討する余地があろう。

(116) 塩酸メタサイクリンの基礎的ならびに臨床的研究

五味二郎・青柳昭雄・富岡 一
熊谷 敬・小穴正治・吉村幸高
鳥飼勝隆・山田淑一・山田幸寛
慶応義塾大学医学部五味内科

塩酸メタサイクリン(以下 MC)について基礎的実験、並びにディスクの検討、臨床治療効果等の検討を加えたので報告する(一部は第 13 回化学療法学会東日本支部総会において報告した)。

試験管内抗菌力を患者由来の菌株で、TC, DMCT と比較検討した。亜急性性心内膜炎血中より分離した緑連菌 10 株では 0.1~0.78 mcg/ml, 咽頭より分離した A 群溶連菌 10 株では 0.05~1.56 mcg/ml の MIC であり咳嗽、化膿巣より分離したブ菌では感受性株 6 株が 0.39~0.78 mcg/ml であつた。尿路感染症よりの大腸菌 6 株中感受性株 2 株では 3.12~1.56 mcg/ml, 尿路感染症および胆道感染症よりのクレブシエラでは 9 株中 4 株が 0.78~6.25 mcg/ml の MIC を示した。MIC が TC よりすぐれた値を示した菌株は 21 株, 劣る値を示した菌株 3 株で、一般に TC に比しすぐれた抗菌力を有する抗生剤であることを知つた。しかし DMCT との比較では、すぐれた MIC を示した菌株, 劣る MIC を示した菌株とも、各々 10 株で MC は DMCT とほぼ同じ程度の試験管内抗菌力を示した。

次いで健康成人男子 5 名に早朝空腹時に MC 150 mg を投与し, 1, 2, 3, 5 時間後の血中濃度および尿中排泄量を枯草菌を用いてカップ法で測定したところ, 5 名の血中濃度平均値は 1 時間値 0.13 mcg/ml, 2 時間値 0.34 mcg/ml, 3 時間値 0.58 mcg/ml, 5 時間値 0.43 mcg/ml で, 3 時間後にピークがみられたが, 5 時間後もさらに血中濃度が高くなり持続するものと思われた。また尿中排泄量は 1 時間値 0.4 mg, 2 時間値 1.39 mg, 3 時間値 2.8 mg, 5 時間値 5.2 mg であり, 5 時間までの総量は 9.8 mg で 5 時間以内の排泄量は投与量の 6.5% にすぎなかつた。

次にわれわれが提供をうけたディスクと, 自家製のディスクとで, A 群溶連菌 3 株を用いてその安定性について検討したところ, MC の 200 mcg/ml, 150 mcg/ml, 100 mcg/ml の pH 7.0 の磷酸バッファー稀釈溶液を東洋沓紙の直径 8.5 mm のディスクに浸ませ(平均 0.053 ml 含有), 4°C 7 日間保存群と 37°C 7 日間保存群とを比較検討したところ, 37°C 保存群では 1 日以内に, 4°C 保存群では 7 日まで漸次阻止径の縮小がみられた。いづれも提供をうけた 30 mcg/ml, 10 mcg/ml, 5 mcg/ml の各ディスクは, 4°C 保存群, 37°C 保存群とも阻止径の差は僅少で, 今回検討した範囲内では, 実用に充分耐えうるものと思われた。

最後に臨床例 31 例につき MC による治療を行なつたところ, 肺炎, 気管支炎, 肺化膿症を含む細菌性呼吸器疾患 18 例中 15 例有効, 腎盂炎, 膀胱炎を含む尿路感染症 7 例中 3 例有効, 胆のう炎 1 例有効の成績であつた。しかし SBE 治療例では, 他の広域抗生剤治療例と同様, 投与中に再発をみとめた。副作用としては 31 例中胃腸障害が僅か 1 例に認められたのみで, その点 TC 系の薬剤としては有用と思われた。

(117) 顎口腔領域における塩酸 Methacycline の使用成績

林 一・斎藤志朗・手島泰治
松尾彰三・八木 伸・若松健一
頼 弘典
東京大学医学部口腔外科学教室

1959 年, Pfizer 研究所の BLACKWOOD 等により, Oxytetracycline より化学的に誘導された塩酸 Methacycline については, すでに基礎的, 臨床的研究が多数行なわれ, その有用性が認められている。

この度, われわれは塩酸 Methacycline を使用する機会を得, (1) ラット臓器内濃度, (2) 健康成人血中濃度および, 唾液中濃度, (3) 臨床使用成績につき検索したので報告する。

(1) ラット臓器内濃度について

ラットに 50 mcg/kg 内服および, 大腿筋に筋注し, 一定時間後に, 屠殺し, 各臓器を十分に emulsion とし, 溶連菌 COOK 株を用いた。鳥居式重層法で測定した。結果は, 内服では, 1, 3, 6, 12, 24 時間について測定したが, ほとんどのものが 3~6 時間に Peak を示し, 筋注では, 15, 30 分, 1, 3, 6 時間の測定で, ほとんどのものが 30 分に Peak を示した。臓器別にみると, 注射側大腿筋が, 全臓器中最高濃度を示したが, 反対側大腿筋では, 内服の場合にのみ, わずかに検出された。次

いで腎に高濃度に認められ、特に 12 時間値に、95 mcg を示した。肝、血液では、筋注に高濃度を示し、30 分値に 11 mcg を示した。切開創を加えた皮膚と、加えない皮膚とを比較したが、両者にはほとんど差が認められず、筋注よりも内服のほうが高く、1 時間値に、10 mcg を示した。口腔内臓器では、舌および、顎下唾液腺が、比較的高濃度を示し、咬筋、下顎骨では、低濃度で、特に下顎骨では、内服でのみ、わずかに検出された。

(2) 健康成人血中および、唾液中濃度

健康成人に、塩酸メタサイクリン 600 mg を内服させ、30 分、1、3、6、10、24 時間後に採血および、自然流出唾液を採得し、(1)と同様、溶連菌 COOK 株を用いた鳥居式重層法にて測定した。結果は、3 時間で 1.7 mcg と Peak を示しており、その後低下しているが 24 時間でも 1 mcg と比較的高濃度を持続し、血中濃度の持続時間の長いことを示している。自然流出唾液中濃度は全時間とも測定不能であった。

(3) 臨床使用成績

東京大学医学部付属病院口腔外科を訪れた、口腔内感染症 11 例と、抜歯後の感染予防のため 5 例に 1 日 600 ~ 1,200 mg を投与した。感染症については、著効 2 例、有効 8 例、無効 1 例であり、有効率は 90% で、感染予防例では、全例において有効であった。副作用は全例ともみられなかった。

結 語

塩酸 Methacycline につき、内服および筋注による各種臓器内濃度を比較したが、内服に高濃度を示した。臓器別にみると、腎に高濃度で、顎口腔領域では、舌および、顎下唾液腺に高濃度を示した。

塩酸 Methacycline は、有効血中濃度を長時間持続すると、いわれているが、この結果でも、それを裏付けた。

(118) 整形外科領域における Methacycline hydrochloride (Rondomycin) の使用経験

大戸輝也・杉山義弘・吉田宗彦

東京慈恵会医科大学整形外科教室

(主任：伊丹康人教授)

Methacycline hydrochloride は血中濃度の持続時が、従来の抗生剤より長く、そのために少量の投与でその効果が期待出来る点が特長とされている。整形外科領域においては抗生剤の長期投与を必要とする症例が多くみられ、したがって副作用の点から少量投与で、臨床効果がある抗生剤が望まれる。われわれは整形外科領域で Methacycline hydrochloride を使用し、その効果を検

討した。

抗菌力：整形外科領域において検出されたコアグラゼ陽性のブ菌 28 株と 209 P 1 株計 29 株をもちい寒天平板希釈法で検査した。ブ菌に対する感受性は他の TC 系抗生剤と同じように 2 峯性を呈し、半数以上が感受性を示し、0.4 mcg/ml にて感受性のピークがある。約 1/3 の 11 株が高度耐性を示しているが、100 mcg/ml 以上の耐性株はない。

血中および関節液内濃度：薄層カップ法を使い、検定菌としてブ菌 209 P 株を使用した。血中濃度は 150, 300 mg 経口投与例ともに、投与後 30 分では測定不能であるが、4 時間後にはピークに達し、1.2, 2.05 mcg/ml の濃度であった。12 時間でもなお 0.6, 0.8 mcg/ml の濃度を示した。関節水腫を有する変形性膝関節症の患者 3 例に 150 mg を経口投与し、関節液内の濃度を測定した。2 時間までは測定不能であったが、4 時間目に 0.78 mcg/ml の濃度を示し 12 時間まで高濃度に持続している。しかも 12 時間では血中濃度よりも高い濃度を維持していた。

臨床成績：急性骨膜骨髄炎 3 例、慢性骨膜骨髄炎 4 例、瘻孔を有する骨関節結核の混合感染 4 例、化膿性腸腰筋炎、プロディー膿瘍、開放性骨折後の感染各 1 例計 14 例に成人量 1 日 600 mg を原則として 1 日 4 回に分けて投与した。その結果は 14 例中著効 3 例、有効 6 例、やや有効 2 例、無効 1 例、中止 2 例で効果判定の可能な 12 例中、著効、有効例をあわせると 9 例で、75% の良好な成績である。この好成绩をえた原因は菌検査の出来た症例の大部分が TC に対して高度感受性を示していたためと考えられる。著効例ではすべて菌は陰性化した。無効の 1 例はレ線上腐骨をみとめた症例である。後に腐骨剔除術を行なつて始めて瘻孔の閉鎖をみている。ここに抗生剤のみによる治療法の限界がある様に思われる。

副作用：29 例中 3 例に胃腸障害をみとめた。

以上の検索結果、Methacycline hydrochloride は整形外科領域においても有効なる抗生剤の 1 つと考えられる。

(119) Methacycline (Rondomycin) の眼科的応用

三国政吉・大石正夫・周田茂雄

今井正雄・高橋篁子

新潟大学眼科教室

Methacycline の眼科的応用のため基礎的、臨床的実験を行なつた成績を報告する。

1. 最小発育阻止濃度

教室保存の 8 菌種 34 株について感受性をしらべ TC のそれと比較した。

KOCH-WEEKS 菌 0.025~0.05 mcg/ml, MORAX-AXENFELD 菌 0.05~1.0 mcg/ml, 肺炎球菌 0.25~0.5 mcg/ml, ジフテリー菌 0.25 mcg/ml, 淋菌 0.05 mcg/ml, レンサ球菌 0.1~5.0 mcg/ml, ブドー球菌 0.1~0.25 mcg/ml および緑膿菌 5.0 mcg/ml で抗菌スペクトルは TC と同様であるが、個々の抗菌力では概して TC よりすぐれている。

2. ブドー球菌感受性

1966 年分離の Coagulase 陽性ブ菌 42 株に対する感受性は $\leq 0.1 \sim > 100$ mcg/ml と広い範囲に分布し 28 株 66.7% が 2.5 mcg/ml 以下で発育を阻止されている。分布の山は 0.25 mcg/ml (35.7%) および > 100 mcg/ml (21.4%) にあり、TC より多少低濃度側に分布する傾向がみられた。

3. 前房水および眼組織内濃度

家兎眼を用い、本剤の眼内移行をみた。

150 mg 1 回経口投与では、血中濃度は 1 時間で 15 mcg/ml と peak 値に達し 8 時間後も測定可能である。前房内濃度は 3 時間まで測定不能、4 時間で peak 0.17 mcg/ml となり 8 時間後も測定可能であった。

0.5% 溶液 5 分毎 5 回点眼による前房内移行は 1/2 時間後 0.08 mcg/ml とすでに移行をみ peak は 3 時間値 0.93 mcg/ml であった。

1% 溶液 0.3 ml 結膜下注射では、1/2 時間 0.06 mcg/ml, peak は 2 時間で 0.14 mcg/ml である。

点眼 3 時間後の眼組織内濃度は前房水が最も高く、以下角膜、球結膜、眼瞼、外眼筋、強膜および硝子体に移行が証明され、虹彩毛様体、網脈絡膜、水晶体では測定不能であった。

結膜下注射 2 時間後では外眼筋 126.75 mcg/ml で最も高濃度の移行がみられ、次いで強膜、球結膜、角膜、網脈絡膜、虹彩毛様体、前房水の順に移行濃度が証明され、水晶体、硝子体では測定不能であった。

このように点眼では主に眼外部、結膜下注射では眼外部のみならず眼内部にもかなりの移行がみられることから、本剤の局所投与も期待できるものと考えられる。

4. 臨床成績

症例は外麦粒腫 10 例、内麦粒腫 13 例、眼瞼結膜炎、眼瞼膿瘍各 1 例および急性涙囊炎 2 例の計 27 例である。

これら症例に 1 日 4 回(8 才男子の 1 例のみ 1 日 3 回) 1 回 150 mg を経口投与し、2~7 日間に総量 0.9~4.2 g 用いて全例効果が認められた。

また 11 例の手術患者に術後感染予防の目的で 1 日 600 mg 3~7 日投与して有効に作用した。

副作用として、術後感染予防の 1 例に軽い胃部不快感、嘔気のみられたが、その他に認むべきものはなかった。

(120) Methacycline による耳鼻咽喉科感染症の治療成績

三辺武右衛門・太田 昇・飯田宏美

関東通信病院耳鼻咽喉科

徐 慶一郎

同臨床検査科

Methacycline(MC) の抗菌力と TC の抗菌力の比較。MC 内服患者血清の起炎菌の増殖に与える影響、および MC を用いた乳幼児の耳鼻咽喉科感染症 64 例の経過について報告した。

1. 抗菌力。MC と TC との抗菌力を *Staph. aur.* 2, *Staph. epid.* 3, *Providencia* 1, *Diploc. pneu.* 2, *Strept. α* 型 1 および β 型 1, 計 10 株について比較した。*Staph. aur.* の 1 株は MIC が TC で 100 mcg/ml 以上, MC で 50 mcg/ml で、残りの 9 株は MC・TC 共に 0.8 mcg/ml で発育は阻止され、両者の抗菌力はほぼ同程度であった。

2. 菌増殖に及ぼす影響: 24 才女子の慢性化膿性中耳炎耳漏より得た *Staph. aur.* と、19 才女子の急性化膿性中耳炎耳漏より得た *Pseud. aerug.* を、それぞれ MC 150 mg 内服前と内服 1 時間後の患者血清と混和し、ブイオンを加え 10 ml とし、キューベットに入れ Biophotometer により増殖曲線を描いた。*Staph. aur.* では誘導期は MC 内服後血清では約 8 時間延長した点は、その間菌の増殖が抑制されたことを示し、対数期曲線の傾斜も MC 内服後血清で緩やかであり、生菌数の増加率の低下を示した。*Pseud. aerug.* では誘導期および対数期曲線は MC 内服前後で著明な差はみられなかった。

3. 臨床成績: MC-Syrup を乳幼児 64 名に使用した。1 才以下 18 名, 6 才以下 41 名, 6 才以上 4 名である。

効果判定規準を、いちおう次のようにした。著効: 服用 1 週以内に自覚症状消失, 他覚的所見も消失または治癒といえるもの。有効: 服用 1 週以上での治癒例。但し慢性副鼻腔炎およびその急性増悪の各 1 例は、自覚的に改善著明であるが、治癒には到らぬものを含めた。無効: 服用にて軽快しないもの、および他剤変更または他処置により治癒したもの。

服用規準: 1 日量として 1 才以下 75 mg, 6 才以下 150~200 mg, 6 才以上 300 mg。もちろん体重、経過により 1 日量として最高 400 mg を用いた。

臨床効果: 急性化膿性中耳炎 34 例およびその再発例 2 例中、著効 19 例, 有効 13 例, 無効 4 例。急性単純性中耳炎 13 例中、著効 10 例, 有効 1 例, 無効 2 例。

急性外耳道炎 3 例共著効。急性扁桃炎 6 例中、著効 3 例、有効 3 例。急性副鼻腔炎 3 例中、著効 1 例、無効 2 例。慢性副鼻腔炎 4 例中、有効 1 例、無効 3 例で、その急性増悪症 1 例は有効。計、著効 53%、有効 30%、無効 17%。

著効例および有効例中菌検出のできた 19 例は何れも TC に耐性はなく、*Staph. aur.* 9、*Staph. epid.* 2、*Diploc. pneu.* 2、*Strept.* 4、*Klebsiella* 1、*Neisseria* 1 である。無効例 11 例中 7 例に菌検出をみたが、TC 耐性は *Staph. aur.* 1 株のみで、*Diploc. pneu.* 2、*Haemophilus* 2、*E. coli* 1、*Strept.* 1 の 7 株はは何れも disc 試験では TC 有効であつたが、臨床的には MC 無効であつた。

副作用：特になし。

4. まとめ：抗菌力は MC と TC とでほぼ同程度。感受性菌では、MC 内服により、ある期間菌増殖が抑制され、その後も増加率の低下がみられる。臨床例 64 例中著効 34 例 53%、有効 19 例 30%、無効 11 例 17% であつた。副作用は特にみられなかつた。

(121) Methacycline (Randomycin)

の外科的使用経験

柴田清人・花井卓雅・加藤剛美
水野貴男・斎藤道夫
名古屋市立大学第 1 外科

Oxytetracycline から 4 段階の化学的合成を経て得られた Methacycline (Randomycin) は内服後の血中濃度が長時間有効血中濃度を持続しかつ尿中排泄量およびその回収率も高く、副作用も少いといわれている。また Methacycline は従来の TC 系抗生剤に比しさらに広範な抗菌スペクトルを持つ薬剤といわれている。われわれはこの Randomycin を外科的感染症に使用し、併せて、血中濃度、尿中排泄量、病原性細菌に対する感受性および Oxytetracycline との交叉耐性の有無について若干の成績を得たので報告する。

1) 血中濃度について。健康成人 3 名について 150 mg および 300 mg を経口投与し投与後 1 時間、2 時間、3 時間、4 時間、5 時間、6 時間後の血中濃度を大久保式常培養法で測定した。検定菌として PC I 219 株を使用した。その結果は 3 時間後にピークを示し 150 mg の場合 1.02 mcg/ml、300 mcg の場合 1.67 mcg/ml を示した。その後漸次減少し 6 時間後に 150 mg の場合 0.58 mcg/ml、300 mg の場合 0.85 mcg/ml を示した。Methacycline と Oxytetracycline と各 150 mg 内服し Cross over してみると Methacycline のほうがそのピークはやや低いが、6 時間後には逆にやや高くなっている。

また Methacycline を各種 Tetracycline 系抗生物質と比較すると、DMC-TC、HCl-TC よりは低濃度を示すが、テトラリサルよりはかなり高濃度を示す。

2) Methacycline の尿中排泄率について。Methacycline 300 mg 内服後 6 時間後には 51 mg 17% 排泄され、24 時間後には 117 mg 39% 排泄された。これを各種 TC 系抗生剤の尿中排泄率を比較すると、Oxytetracycline よりは少く、DMC-TC、HCl-TC よりは多量に排泄されている。

3) Methacycline のブ菌に対する抗菌力について。外科的病巣より分離せるコアグラゼ陽性の病原性細菌 60 株に対し平板希釈法により Methacycline に対する感受性を測定した。その結果は 3 mcg/ml 以下に 31 株 (52%) を示し 100 mcg/ml またはそれ以上の高度耐性株は 10 株 (17%) が認められた。また Oxytetracycline との交叉耐性の有無を調べるとほぼ交叉耐性が認められた。

4) Methacycline の臨床使用成績について。Methacycline を 21 例の外科的感染症に使用した。投与量は成人では 1 日 600 mg 4 回に分けて投与し学童ではその半量を投与した。効果判定は投与後 3~5 日までに炎症症状が改善された場合を有効とし、改善されない場合を無効と判定した。その結果は 21 例中 16 例に有効例を認め無効 5 例であつた。その有効率 76% であつた。

副作用として 2 例に軽度の悪心を認めた。

症例として、白血球数 14,600 で虫垂切除術を施行し術後クロマイ 1 g 投与し、一旦解熱せるも、第 4 病日より発熱あり、Methacycline 600 mg 投与を開始し、投与後 3 日目より解熱し軽快した。

さらに症例として直腸癌根治手術後 7 日目より発熱あり、手術創より膿汁を見、培養により黄色ブ菌を証明し Methacycline 600 mg 投与により投与後 5 日目より膿汁の減少を見、軽快した。

主題 B-5 各種感染症

第 1 群

(122) 淋菌診断における蛍光抗体法の応用

水野重光・松田静治
弓立博・番匠信夫
順天堂大学医学部産婦人科学教室

われわれは昭和 37 年以来、横須賀地区の米兵を相手とする特殊業態婦、並びに東京都の売春容疑者について淋菌の検索を続けて来たが、その診断上の蛍光抗体法の意義と応用成績について検討し、いささかの知見を得た